

シェイクスピアと農業 (3)

——エリザベス朝「農書」の系譜——

Shakespeare and Agriculture (3): A Genealogical Study of Elizabethan Husbandry Manuals

上村 幸弘

UEMURA Yukihiro

【要旨】

16～17世紀のイングランドで営まれてきた農業について、シェイクスピアの故郷ウォリックシャーから考察を進める。そこは貴族が没落していく土地であり、修道院が解体される現場でもあった。大荘園の維持が困難になり、分割・転売された土地を受け継ぐのは後のイングランドの市場経済を牽引するヨーマンたちである。彼らに向けて書かれた当時の農書は、利益を生み出す農業を肯定的に捉え、プロテスタントの合理的かつ儉約の精神に富む労働倫理を打ち出している。前章「中世から初期近代イングランドにおける農業倫理」を承け、本稿はその第3章として「エリザベス朝農書と文芸作品」の関係を論じる。

【Abstract】

This third chapter begins with the agrarian activities in Warwickshire in the 16th century, where William Shakespeare was born and bred. By the middle of the century, aristocratic landowners had been brought to ruin and monastic manors dissolved throughout the country. Towns and villages in Warwickshire were no exception. The rising social class called yeomanry took over the land from the manorial estates and improved their own farming methods to make a profit. Agrarian manual writers targeted this audience with the Protestant sense of “thrift.”

【キーワード】

ウォリックシャー (Warwickshire)、儉約・繁栄 (thrift)、修道院解体 (dissolution of the monasteries)、ストラットフォード (Stratford)、プロテスタント倫理 (Protestant ethic)、没落貴族 (impoverished aristocrat)、ヨーマン (yeoman)、労働倫理 (work ethic)、カンパネッラ (Tommaso Campanella)、クロウリー (Robert Crowley)、スペンサー (Edmund Spenser)、タッサー (Thomas Tusser)、マーカム (Gervase Markham)、ローダー (Robert Loder)

第3章：エリザベス朝「農書」と文芸作品

第1節：シェイクスピアの原風景

1. ウォリックシャー

ウォリックシャー (Warwickshire) のヘイスリー (Haseley) では 1523 年にロックソール (Wroxall) の小修道院長が屋敷、小作地、果樹園をリチャード・シェイクスピア (Richard Shakespeare) とリチャード・ウッドダム (Richard Woodham) に 25 年の期限付きで貸している。その時の条件が、イバラ、バラ、サンザシなどの下生えを芟徐し、土地を耕作地または牧草地にしたうえ、契

約期限終了時には囲い込んで、柵を残したままにしておくようにというものであった。契約期間は長いものではないが、借地人が土地改良を行い、改良の価値に見合った現金収入の見通しを修道院に立たせるには十分な期間であった。(Youings 315-16)

ロックソールはストラットフォード・アポン・エイボン (Stratford-upon-Avon) の北東約 20 キロに位置し、当時は女子小修道院 (Wroxall Priory) を中心とした荘園の村であった。記録に残る年代とその姓名から、ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の祖父リチャード・シェイクスピア (Richard Shakespeare, 1490-1561) とロックソールの上記の人物が同一人物であると見る向きもあったが、いまでは別人とされている。確かに、ウィリアム・シェイクスピアの祖父リチャードの家系はロックソールやその近隣のロウイントン (Rowington) を地盤にする一族であったらしい。しかし、リチャード自身、1520 年代にはすでにストラットフォードから北東に 7 キロほど離れたスニッターフィールド (Snitterfield) で地主のロバート・アーデン (Robert Arden, 1506-1556) から土地を借りて小作農として農業を営んでいた。ロックソールのリチャード・シェイクスピアとスニッターフィールドのリチャード・シェイクスピアはほぼ同じ時期に、前者は小修道院長から、後者は平信徒地主から、それぞれ条件の異なる土地を借りて農業を生業としていた。

しかし、1535 年にヘンリー 8 世によって修道院解散が行われ、ロックソール小修道院の領地も地元の大貴族のヘイルズ (グロスターシャー) のリチャード・アンドリュース (Richard Andrewys of Hayles, co. Glos.) とウッドストック (オクスフォードシャー) のレオナード・チェンバレイン (Leonard Chamberlyne of Woodstock, co. Oxon.) に払い下げられた後、1544 年 12 月 8 日にロバート・バーゴイン (Robert Burgoyne) とジョン・スクードモー (John Scudamore) というジェントリーに転売されている (BHO)。こうして土地の売買が活発化し、農業の形態も大きく変化していくなかで、ロックソールのリチャード・シェイクスピアも時代の波に呑み込まれていったことであろうことは推測に難くないが、「修道院の領地の管理はすでに宗教改革以前から、借地のみならずその運営に至るまで、ほぼ完全に平信徒の手に委ねられていた」(Heal 324) ということであれば、その後もリチャードは順調に農業に従事していたと考えられる。宗教改革後の 1530 年代、40 年代、50 年代のロックソールの記録に、借地代金や土地取引に関して、リチャード・シェイクスピアの名前がたびたび登場するのはその証左なのかもしれない (The Shakespeare Family History Site)。

一方、スニッターフィールドのリチャード・シェイクスピアは、アーデン一族の土地を借り受けていた。アーデン一族はアングロ・サクソンの領主サーキル・オヴ・アーデン (Thurkill of Arden) にまで遡る名家である。11 世紀の『ドゥームズデイ・ブック』(Domesday Book) にもサーキルのカードワース (Curdworth) における土地所有が記録されている。さらに一族の中には薔薇戦争でヨーク側について 1452 年に処刑されたロバート・アーデン (Robert Arden)、逆にヘンリー 7 世の宮廷で近臣 (Esquire of the Body) として仕えたジョン・アーデン (John Arden) らがいた (ジョンはシェイクスピアの母メアリー・アーデンの大叔父)。

シェイクスピアの母メアリー・アーデンはウィルムコート (Wilmcote) のグリーブ・ハウス (Glebe House) に暮らしたが、メアリーの父ロバート・アーデンは約 135 エーカーの地所に加え、アスピーズ (Asbies) と呼ばれる土地 30 エーカーとスニッターフィールドにも土地を持っていたというから、当時の農家としては大農家と言える。ウスター文書館 (Worcester Record Office) には結婚前のメアリーに父ロバートが残した 1556 年 11 月付の遺書が保管されており、それに添付された財産目録には 16 世紀テューダー朝の豊かな地主の生活を髣髴とさせる調度品の他、長柄鍋 (skillets)、かなてこ (iron

crows)、手桶 (pails)、つるはし (mattocks)、大釜 (cauldrons)、錐 (augers)、碾き臼 (querns)、片手鋸 (handsaw)、組立椅子 (joint stools)、戸棚 (cupboards)、長椅子 (benches)、長枕 (bolster)、枕 (pillows)、手拭 (diaper) といったシェイクスピアの作品に出てくる道具類に相当する物品が含まれている。これだけの資産を有し農業を営んでいくためには、常時勤務の農夫や季節労働者も雇用していたことだろう。「これら設備の整った家屋敷が表象する世界にウィリアム・シェイクスピアは生まれ落ちた。堅実で、現実的で、実質的な世界にである」とマイケル・ウッドは語る (Wood 26-27)。

2. 貴族没落と修道院解体

母方の祖父ロバート・アーデン所有のスニッターフィールドの土地を借りて、父方の祖父リチャード・シェイクスピアが小作農として農業を営んでいた 1520 年代、この地域もまたいまだ長引く後期中世の人口減少と囲い込みで、農村の荒廃に喘ぐ地方都市であったはずだ。

1349 年と 1520 年頃の荘園領主の名前を比べてみれば、約 80 パーセントの荘園で持ち主が代わっていることがわかる。ジェントリー階級への新たな参入者には、王室関係者、弁護士、コヴェントリーやロンドンの商人がおり、そこに俄かに登場したヨーマンたちが加わった (Dyer 3)。

ダイヤー (Christopher Dyer) によれば、修道院解体以前からすでに土地取引は活発化しており、実態として農業経営者が頻繁に入れ替わっていた。代々有力貴族としてウォリックシャーを地盤にしてきたビーチャム伯爵家 (the Beauchamps earls of Warwick) の所領も 15 世紀末に王領地として接收されている。しかし、「ウォリックシャーの農地耕作の担い手の大部分は、ジェントリーでもなければ直営地の農家でもない。当時の人々がハズバンドマン (husbandman) とかヨーマン (yeoman) と呼んでいた階級である。さらにその大部分は 1520 年頃までに 1 ヤードランド (30 エーカー) ほどの土地を所有し、3 ヤードランド以上保有する者はめったになく、24 エーカーから 100 エーカーまでの保有に留まった」(Dyer 22) という。シェイクスピアの時代にはビーチャム家の所領も細かく切り売りされ、かつて封建領主が造営した広大な荘園の景観もすでに失われていたであろう。それでもシェイクスピアは 15 世紀に栄華を極めたウォリック伯爵の言葉に中世の残像をそっと仕舞い込む。

Lo, now my glory smear'd in dust and blood!
My parks, my walks, my manors that I had,
Even now forsake me; and of my lands
Is nothing left me but my body's length.
Why, what is pomp, rule, reign, but earth and dust?
And live we how we can, yet die we must. (*3 Henry VI*, V. ii. 23-28)*

見よ、我が栄誉は今や塵に、そして血に塗れている。
我が猟場、我が遊歩道、我が荘園も
私を見捨て、私に残された土地は
この身の丈に合った墓地だけになった。
ああ、栄華とは、支配とは、権力とは、土埃のことなのか。
いかに生きようとも、最後は死が待つだけだ。

第3代ヨーク公爵リチャード・プランタジネット (Richard Plantagenet, 3rd Duke of York, 1411-1460) を支え続け、その長男エドワードの即位に大きな役割を演じたキング・メーカーことリチャード・ネヴィル (Richard Neville, 1428-1471) は、ウォリック伯爵リチャード・ビーチャム (Richard Beauchamp, 13th Earl of Warwick, 1382-1439) の娘アン (Anne Beauchamp, 1426-1492) と結婚し、1449年ビーチャム家の16代目となるウォリック伯爵位とその所領を受け継いだ。1471年にバーネットの戦いで戦死する (享年42歳)。この場面を描くためにシェイクスピアが参考にしたのは、エドワード・ホール (Edward Hall) の年代記『ランカスター、ヨーク、両名家の和合』 (*The Union of the Two Noble and Illustre Families of Lancaster and York*, 1543) のエドワード4世10年目の記述である。

This ende had Richard Neuell erle of Warwicke, whose stoute stomacke, and inuinsible corage, after so many straunge fortunes, and perilous chaunces by him escaped, caused death before he came to any old age priuilie to stele on hym, and with his darte to take from hym all worldly and mundain affeccion: but death did one thing, that life could not do, for by death, he had rest, peace, quietness, and tranquillitie, which his life ever abhorred, and could not suffer nor abide. (Hall 296)

ウォリック伯爵リチャード・ネヴィルはこのようにして最期を迎えた。その強靱な精神、無敵の勇気により、未曾有の出来事を幾度となく乗り越え、命の危険を幾度も回避し続けたが、それが結果的に老齢を待たずに死期を早めさせ、この世の楽しみまでもいと素早く奪ってしまった。だが死は、生が成し遂げることのできないことをただ一つだけやってのけた。死によってリチャードは休息、平安、静寂、清閑を手に入れた。それは彼が生前、常に嫌悪し、耐え忍ぶことができないものであった。

シェイクスピアの描くウォリック伯爵の最期は、材源が醸し出す無常の観念を踏襲しながらも、そこから遙かに具体的なイメージへと跳躍している。「我が猟場、我が遊歩道、我が荘園」と踏み込んだとき、シェイクスピアの脳裏にはいったいどのような景観が浮かんでいたのだろうか。しかし、これはウォリックシャーに限ったものではない。むしろ、ウォリックシャーもまた例外なく全国的な土地の流動性の中にあっただけであらう。

1540年代以降、ホスキングズがドゥームズデイ以来最大の土地所有の移動と呼ぶ事態が発生している。多くのヨーマンが土地所有者となった。父や祖父が借地人として耕してきた土地だ。さらに、土地所有者として成功を収めた者がジェントリーとして成り上がった。当時の世論をそのまま信じるなら、16世紀から17世紀の変わり目は土地取引がことに活発であった。(Batho 302)

貴族の没落や修道院解体によって流動化した土地取引は、さらに1590年頃から再びその動きが顕著になってきた。1つには穀物価格の高騰が関係する。食糧価格は1500年から1550年の50年間で2倍に、1590年までにはほぼ4倍に上昇している。1594年から97年にわたる大飢饉によりさらに跳ね上がり、1600年代にやや落ち着くものの、1640年までには対1500年比でおよそ6倍になったと言

われている (Batho 291-92)。エリザベスの議会で 1597 年から 98 年にかけて「農村および農家の荒廃防止法」(An Act against the decaying of towns and houses of husbandry) が成立した。農地から転用された牧羊地を耕作地に回復させ、囲い込みによって荒廃した農家を再興することを企図するものである (Scott 83)。市場経済に逆行するこの法律は、しかし、穀物価格が高値で安定しているうちには有効であると見られていたが、1601 年に食糧価格が落ち着き始めると直ちに廃止が検討されるほど、政府の方針も揺らいでいたと言われている (Thirsk 231)。

この法令が施行される前年の 1596 年にシェイクスピアは故郷ストラットフォードで 2 番目に大きな邸宅ニュー・プレイス (New Place) を購入している。しばらく放置されていた家屋を改修したのち、1598 年までに家族で移り住み、同年の町の記録によると新たに増築された納屋にはビール (エール) 醸造用の小麦と麦芽が 10 クォーター (80 ブッシェル) 貯蔵されていたとある。さらに興味深いことは、1602 年、シェイクスピアは町の中心部から北へおよそ 2 キロ離れたところにある耕地 107 エーカーを 320 ポンドで現金購入している。共有地 20 エーカーに羊や牛の放牧権も付帯していたという。シェイクスピアはそれをトマス・ヒッコックス、ルイス・ヒッコックス兄弟 (Thomas and Lewis Hiccox) に貸してテナント料を得ている。さらに同年、ニュー・プレイスの庭に面した向かい側、チャペル・レーン (Chapel Lane) の南側に 1/4 エーカーの庭付きの小屋を取得しているが、ここに庭師や召使いを住ませた (Schoenbaum 33)。

一方、1596 年シェイクスピア家は紋章の申請が受理され、ジェントリーとして認可される権利を得たのであるが、上述のような耕地取得の観点から見ても、ウィリアム・シェイクスピアもまた、第 2 章で述べたタッサーやヘレスバッハの農書が対象とした読者の範囲に入ると言えるだろう。シェイクスピアが最新の農業経営論に興味を持っていたという仮説を立ててみることは、あながち乱暴な発想ではないかもしれない。

第 2 節：ヨーマン／ハズバンドマン

1. クロウリー

Thou that arte borne the ground to tyll,
Or for to laboure wyth thyne hande,
If thou wilt do nought that is yil,
Desyre not idle for to stande.

But se thou do plowe, plant, and sow,
And do thy nedeful business,
As one that doth his duty knowe,
And wyll not the Lords wyll transgresse.

(*The Voice of the Last Trumpet, The Yoeman's Lesson, 225-32*)

大地を耕すために生まれてきた者よ、
自身の手を使って働くために生まれてきた者よ、
たとえ邪悪なことをするつもりがなくとも、
怠けることのないように心掛けよ。

耕し、植え付け、種を播け、
必要な仕事をしっかり熟せ、

務めを心得る者として、
 主の御心に背かぬ者として。

ロバート・クロウリー (Robert Crowley, c. 1517-1588) の名は、ウィリアム・ラングランド (William Langland) の『農夫ピアスの幻想』(*The Vision of Piers Plowman*) の印刷出版業者として知られている。また、クロウリーはロンドンおよび地方各地で説教を行っており、それを説教集として出版している。説教師としてのクロウリーの人気は高かった。1534年ごろオクスフォード大学に入学すると、すぐにモードリン・カレッジ (Magdalen College, Oxford) の特別給付金受給者となる。その後、プロテスタントの論客として聴衆をひきつけたが、1553年にメアリー1世が即位し、カトリックへの回帰が起こると、多くの新教徒とともにフランクフルトに亡命する。エリザベス1世の即位(1558年)に合わせて帰国を果たし、1559年にはヘレフォードで大執事の職を務め、翌年にはヘレフォード大聖堂参事会員に任命される。『最後のラッパの響き』(*The Voice of the Last Trumpet*, 1550) は韻文で書かれた説教で、12の職業階級に属する者に向けて心得を説く(12番目の「女性の心得」だけは職業階級とは異なるが)。引用部分はそのうち、「ヨーマンの心得」の冒頭である。クロウリーの労働倫理は「ジェントルマンの心得」を読むとさらにはっきりする。

Thou that arte borne to lande and rent.
 And arte cleped a gentleman,
 Geue eare to me, for myne intent
 Is to do the good if I can.

Thou arte a man that God hath set
 To rule the route in thy countrey;
 Wherefore thou hadste need forto get
 Good knowledge rather then money.

(*The Voice of the Last Trumpet*, The Gentleman's Lesson, 1177-84)

生まれながらに土地と地代を与えられし者よ、
 ジェントルマンと呼ばれる者よ、
 私の話に耳を傾けよ、私の思いは
 できる限りの善を説くことにある。

汝は郷土の民を治めよと
 神に選ばれし者なり。
 それ故、銭金よりも
 智恵を蓄える必要を覚えよ。

マクレーの言葉を借りれば、クロウリーの労働倫理は「中世的な階級原理と発生期にあるプロテスタントの職業概念が混じり合っている」のであり、ジェントルマンに対しては「知識、正義、中庸、慈善の徳」を求めているものの、下位にあるヨーマンや召使いとの関係性についてはその主従関係が固定化されているとも指摘されている (McRae 47)。しかし、その文学的表現は、「黙示録の最後のラッパ奏者である大天使ガブリエルのペルソナを使って、優雅な啓示的比喩を展開しながら、『農夫ピア

ス』や『詩篇』のように詩人と預言者がクロウリーの詩の中で融合している」(King 342)。

確かに、ここでクロウリーがヨーマンに定めた労働倫理は、例えば13世紀の農書『執事の務め』(*The Office of Seneschal*)にあるように、荘園差配人等の管理者が農業従事者に対して求める倫理観であり、神の意思と領主の意思を一致させながら農業労働の必要性を説く中世的な階級原理と読める。ジェントルマンが生まれながらに土地と地代収入をあてがわれていることを前提にしつつ、金銭の貯えに執心することを戒めている。その一方で、ヨーマンについてはその労働の対価に関する心得を次のように説く。

And if wyth thy labour thou get
 Money much more then thou doste need,
 Do not thy mynde on rayment set,
 Neither on deynnty fode to fede.
 (The Yoeman's Lesson, 257-60)

もし労働によって必要以上の
 金銭を手にしたとしても、
 衣服に興味を向けてはならない、
 美食を求めてはならない。

ヨーマンに対して贅沢を戒めていることはもちろんであるが、労働によって必要以上の金銭を手にすることができる可能性を示唆している。これは前章で扱ったフィッツハーバートの『農書』で「利益を上げたいと思う若きジェントルマン」への提言やタッサーの『農業要訣五百箇条』(1557年)の教訓「儉約への階段」で利益を求めること前提にする発想と通底する概念である。すなわち、オーウィン(C. S. Orwin)の言う「利益を求める農業」(*Farming for Profit*)である(Orwin 25ff)。

2. ローダー

ヨーマンの利益を求める農業を検討するにあたって前章で扱った「儉約への階段」を、マクレーの「利益に執心する農夫」(*Thrift-Coveting Farmer*)の項(McRae 143ff)に則して読み直しておく。

今の仕事を天職と思って感謝し、物乞いへの道を閉ざすがよい。
 若い時の苦労は厭わず、十分に知識を身につけること。
 骨折り仕事を割に合わないと思わぬこと、塵も積もれば山となる。
 熱心に利益を求めるのはよいが、人の金をくすねるような真似はするな。
 正直に金を儲け、手に入れたものはこっそり仕舞っておくこと。(‘The Ladder to Thrift’, 1-10)

‘The Ladder to Thrift’を「儉約への階段」と訳すことは、ある意味で誤訳であり、ある意味で正解でもある(原文は前章参照のこと)。マクレーに倣って‘thrift’の定義を *OED* で確認しておく。

1. The fact or condition of thriving or prospering: prosperity, success, good luck; in early use sometimes = fortune (good or bad); luck

2. Savings, earnings, gains, profit; acquired wealth, estate, or substance. arch.
3. Economical management, economy; sparing use or careful expenditure of means; frugality, saving;

1. の「繁栄」「成功」を意味する用法は現代ではすでに使われておらず、2. の「貯え」「儲け」「利得」「利益」の用法も archaic (廃れている) とされている。通常「儉約」と解釈される 3. の用法は「経済的な管理」「経済性」「資産の節約・慎重な支出」:「質素」「貯蓄」を意味し、1550年代から用例が採用されている。すなわち、16世紀における‘thrift’の用法は「繁栄」「成功」と「質素」「儉約」の両面を持つ語として揺れている。‘The Ladder to Thrift’はヨーマンにとっては当然「繁栄への階段」でもあるわけである。

バークシャーのロバート・ローダーが残した会計記録は彼の名を不滅のものにした。彼は生活のための農業に飽き足らず、市場に出荷するために小麦や大麦を栽培した。ロンドンや自分の屋敷に近い市場町でも簡単に売れると踏んでいた。彼はエリザベス朝およびステュアート朝初期に出版された夥しい数の農書が推奨する方法で土地の改良に着手し、たとえば、石灰を買い込んで毎年施肥を行った。彼の会計記録の編纂者が述べる如く、彼は資本、管理作業、肉体労働の支出の財政的な見返りとしてできる限り多額の利益を求め、それを維持するために最大限の努力をした。

(Batho 303)

ロバート・ローダー (Robert Loder, 1589-1640) の農場は丘陵地帯バークシャー・ダウンズ (Berkshire Downs) の北側に開けたハーウェル教区 (the parish of Harwell) にあった。ローダーはこの農場を1610年に相続している。

(表に見られるように、) ローダーは2年おきに同じ畑で小麦を栽培しているが、時々その休閑期を長めに取ることがあった。休閑後に小麦が記録されていない畑では、おそらく大麦が栽培されていたと思われる。さらにウェスト・フィールドの畑では1613年に小麦が播種され、1615年にマメ類が間作され、1617年には再び小麦が播かれている。ローダーはタッサーが理想とする輪作に倣って作付けを行っていた可能性がある。(Fussell 13)

ヨーマンが特定の農書を読んでいたことを実証することは困難であるが、ファッセルはローダーの作付けのパターンからタッサーの農書の輪作の技術を実践していると見る。その材源と推測されるのが『五百箇条』の10月のスタンザである。

Some useth at first, a good fallow to make,
To sow thereon barley, the better to take.
Next that to sow pease, and of that sow wheat,
Then fallow again, or lie lay for thy neat.
(*Five Hundred Points of Good Husbandrie*, October 22)

まずはしっかりと土地を休ませること、

収量を増やすためには、その後オオムギを播く。
次にマメ類を播き、それが終わればコムギを播く、
そして再び休耕地とするか、畜牛のために秣を撒く。

タッサーは、「オオムギ」「マメ類」「コムギ」の順に輪作することを勧める。ローダーのようなヨーマンは自ら農夫でありながら、農園を経営するにあたっては効率的な作業を重視するようになり、農業経営から利益を生み出すために収支を記録するようになった。イングランドにおける農業のしくみが市場化していることを如実に物語っている。「屋根ふき」「生垣囲い」「刈り入れ」「草刈り」「干し草積み」「脱穀」「あおぎ分け」「麦芽のかき混ぜ」等の経費の細目がローダーの会計記録に残る (Everitt 430)。

第3節：農書作家マーカム

ジャーヴェイズ・マーカム (Gervase Markham, 1568?-1637) は没落貴族の末裔と言える。マーカム家は15世紀には5カ所の地所を保有する一族であったが、父ロバートの代に財産の大部分を手放し、相続権のある長兄が死去した時点ですべての地所が売却されたと言われている (Best xi)。

マーカムは実に多くの分野で作品を残した文筆家であったが、当時の評判も含めて、文学的な評価は芳しくない。むしろ、剽窃やコンテンツの使い回しなど、文学者としては独創性や創造性の欠如した作家とも言えるかもしれない。しかし、『イギリスの農夫』 (*The English Husbandman*, 1613)、『さらば農業』 (*Farewell to Husbandry*, 1620)、『イギリスの主婦』 (*The English Housewife*, 1615) など、農業関連の著作や家政書は、重版されながら読み継がれているのも事実で、シャルル・エステイエヌ (Charles Estienne, 1504-1564) の『農場』 (*Maison Rustique*) を英訳したことで知られることから、時流の農書作家の範疇で、一定の評価が与えられてしかるべきであろう。

スコットの指摘を援用しつつ、マーカムの農書を読みたい。スコットは『イギリスの農夫』の序説・第1章「農夫の有用性」 (*The Vtillitie of the Husbandman*) を引く (Scott 14)。

A Husbandman is the Maister of the earth, turning sterillitie and barrainnesse, into fruitfulness and increase, whereby all common wealths are maintained and upheld, it is his labour which giueth bread to all men and maketh vs forsake the societie of beasts drinking upon the water springs, feeding vs with a much more nourishing liquor. The labour of the Husbandman giueth liberty to all vocations, Arts, misteries and trades, to follow their seuerall functions, with peace and industry, for the filling and emptying of his barnes is the increase and prosperitie of all their labours. To conclude, what can we say in this world is profitable where Husbandry is wanting, it being the great Nerue and Sinew which houldeth together all the ioynts of a Monarchie? (*The English Husbandman*, Former Part, Ch.1)

農夫は土壤に精通しており、痩せた土地や不毛の地を実り豊かな収量の多い土地に変えるのであるが、それによって国家が維持され健全な営みが行なえる。農夫の仕事のおかげで、人々はパンを与えられ、野生の動物のように湧き水を飲む社会に別れを告げ、栄養豊富な飲み物を飲めるようになった。農夫の仕事は、あらゆる職業、諸芸、商工業にそれぞれ独自の作業が遂行できる自由を与え、安らぎと勤勉をもたらす。なぜなら、穀倉の充填補充こそがあらゆる労働にとって向上繁栄の源であるのだから。突き詰めて言えば、農業のない世界は豊かな世界と言えるだろうか。

農業こそは王国のあらゆる関節を繋ぎ合わせるまさに筋髄である。

農夫 (husbandman) は不毛 (sterillitie) の土地を実り (fruitfulness) の土地に変えることができる匠である。この似非魔術師のそれともいえる土壌改良の技法が『イギリスの農夫』の全編にわたって見られるとスコットは指摘する (Scott 14n)。あらゆる産業分野は、農夫がもたらす食糧によってその営みが可能になる故、農業こそは国家の要であると言う。解釈はさまざまあろうが、いわゆる農本主義の思想が根本にある。

16世紀から17世紀にかけて、トマス・モアの『ユートピア』やトンマーズ・カンパネッラ (Tommaso Campanella, 1568-1639) の『太陽の都』 (*La Città del Sole / The City of the Sun*, 1602) などの理想郷が共産主義的な農業経営を打ち出したのは偶然でない (『ユートピア』については第2章参照)。

You have already seen that military service and work in the fields and pastures are common to everyone and that everyone must be familiar with them. (*The City of the Sun*, 81)

ご存じの通り、軍務および農作業と牧畜業は誰もが行き、誰もが精通していなければなりません。

このように農業を軍務とともに国家建設の基部に据えるのは『ユートピア』が生れるのと同じ原理で、価値観の揺らぐ世相にあって、絶対的な真理を求めようとする強靱な精神は、改革派からも反改革派からも遠い位置に置かれる。すなわち、カンパネッラの共産主義的な思想は、王侯貴族の利権とも、カトリック教会の利権とも、またプロテスタント的な個人主義が市場原理を促進する流れとも、およそ相反する。しかし、『太陽の都』には土壌改良に関する興味深い記述がある。カンパネッラは人々が農地に肥料を用いず、土壌をこねて改良を行うと言う。女性が化粧を用いて美しさを維持しようとするや虚弱な子どもが産れるように、肥料による土壌の改良は地力を弱めるという奇妙な理屈を展開するが、これはウェルギリウスの『農耕詩』に従っていると弁明する (83-85)。さしずめ以下の箇所が思い当たる。

Much service, too, does he who turns his plough and again breaks crosswise through the ridges which he raised when he cut the plain, ever at his post to discipline the ground, and give his orders to the fields. (*Georgics*, 105)

農夫はまた犁の向きを変え、今しがた耕して立てたばかりの畝を今度は十字(直角)に切り込んでいく。こうして農夫は自分の持ち場の土壌を常に鍛え、農地を思いの通りに改良していく。

ただ、ウェルギリウスは「輪作によって土壌の負担は軽くなる。また、乾燥しきった土壌には栄養豊富な肥しを十分に与えることを嫌がってはいけぬ」(同 105)とも述べている。いずれにせよ、第1章で述べたようにウェルギリウスの『農耕詩』の成立過程を鑑みると、それはやがて『アエネイス』という国民的叙事詩へとつながるローマ復興の思いが根底にあった。シェイクスピアと同時代に(そしてマーカムと同時代に)イタリアで書かれた理想郷論には、後期ルネサンス・ヨーロッパが共通で抱えていたジレンマが映し出されている。ユートピアが海に囲まれた島であったように、太陽の都は幾重もの城壁に囲まれた要塞、そしてフランシス・ベーコン (Francis Bacon) が後に著す『ニュー・

アトランティス』(*New Atlantis*, 1627) もまたペルーから日本へ向かう太平洋上に浮かぶ孤島ベンサレム。いずれも周囲の国々との関係性を断つかのような理想郷の設定は、盛期ルネサンス・ヨーロッパが展開してきた多角的交流とは全く異なる政策であり、孤立主義、保護主義的な立場をとる。

マーカムの国土に対する姿勢が、彼の著作に明確に現れているとウェンディ・ウォール(Wendy Wall)は見る。

マーカムは実際、イギリス農業の言説の必要性について強く訴えているが、それは農業生産性のためでもあり、自国の農法を示して大陸との違いをはっきりさせるためでもあった。マーカムは自著をきっぱりと実用性がその使命であると述べているし、それはイギリスの農法および農書を他国の影響から浄化し、自国および大陸の読者にイングランド化を印刷した形で定着させることを目的とする。(Wall 772)

ウォールは「ルネサンス国家農業——ジャーヴェイズ・マーカムとイングランドの出版事情」(‘Renaissance National Husbandry: Gervase Markham and the Publication of England,’ 1996)で、マーカムの農書に対する一貫した姿勢を **Englishing** という語を用いて説明を試みる。

国家、土壌、労働、原著者。これら4つの概念は、時代が異なればまったく別の話になるが、初期近代のテキストにおいてはまとまった概念を形成している。スペンサーの壮大な叙事詩『妖精の女王』から日常的に利用されてきた農業用の小冊子に至るまで、16世紀後半から17世紀前半の書籍市場が賑わいを見せる中、著述家たちがこれらの概念について熟考し、その関係性について記述してきたということは間違いない。本稿において私が検討したいと思うことは、ジャーヴェイズ・マーカムの農書の表現法、特に『農場』における表現法がいかに初期近代の国家観形成に寄与しているかについてである。マーカムの土壌のイングランド化 (**Englishing the soil**) に対する興味は、著作・出版事業と複雑に結び付いており、著述家として携わったマーケティング部門とも繋がっている。スペンサーの自己形成や国家観形成についての一般的な読み方の範囲内に、マーカムの農業に関するイングランド化 (**nationalizing of husbandry**) を位置づけてみた場合、いかに「イングランド」が土地と同時に著述活動の言語を通して定義されているかがわかる。

(Wall 767)

16世紀後半から17世紀前半にかけて、イングランドはヨーロッパにおける政治的、経済的、軍事的プレゼンスを高めた。それは象徴的にはスペインとの軍事衝突に勝利したことがきっかけとなったことは確かであるが、ヘンリー7世以来のいわゆる「テューダー神話」(**The Tudor Myth**) の創造とヘンリー8世の宗教改革による脱カトリックがここにきて結実してきたかに見える。それが文芸作品として最も顕著な形となって現れるのがスペンサー (**Edmund Spenser, 1552?-1599**) の『妖精の女王』(*The Faerie Queene*, 1596) であり、その文脈にマーカムの土壌改良を組み込むとき、マーカムの種々の著作が孤立主義や保護主義といわないまでも、少なくとも **Englishness** を表象した作品群として、テューダー神話を形成する裾野となり、さらにはプロテスタント的な労働倫理の言説に寄与していることは積極的に評価できるのではないか。スペンサーは国家形成の礎として農業の(そして農夫の)役割を重視し、自らが詩人のイメージを農夫と重ねている。農業はもはや恥ずべき仕事ではなく、むしろ有用で、誉れ高く、輝かしい結果を生み出す能力があるが (Low 37-38)、マーカムの『イギリ

スの農夫』序説・第1章「農夫の有用性」の言説はその文脈にみごとに合致する。

『イギリスの農夫』をもう少し読み進めてみよう。マーカムは続いて農家の建屋について言及し、第3章以降は犁に関して詳細な検討を加える。特に、土壌・土質に応じた犁の使い分けや、農機具のパーツごとの説明を詳述し、本論に入ると第1節で土壌改良のための施肥や播種法、第2節では植え付け、接ぎ木、植え替えなどの技術論が展開される。その第2巻第15章において、庭造りをする者（gardiner）への心得が記される。

There is to be required at the hands of euery perfect Gardiner three especiall verues, that is to say, Diligence, Industry, and Art: the two first, as namely, Diligence (vnder which word I comprehend his loue, care, and delight in the virtue hee professeth) and Industry (vnder which word I conclude his labour, paine, and study, which are the onely testimonies of his perfection) hee must reape from Nature; for, if hee be not inclined, euen from the strength of his blood to this loue and labour, it is impossible he should euer proue an absolute gardiner; the latter, which containeth his skill, habit, and vnderstanding in what hee professe, I doubt not but hee shall gather from the abstracts or rules which shall follow hereafter in this Treatise.....
(*The English Husbandman, The First Part*)

理想的な庭師に求められる重要な特質、すなわち、「努力」「勤勉」「技術」であるが、特に最初の2つ、つまり「努力」という言葉に関して私が言いたいのは、庭師が職人氣質として持つべき「情愛」「気配り」「喜び」という特質であり、「勤勉」という言葉に込めたいと思うのは庭師に求められる「精勤」「骨折り」「探究心」で、これがなければ理想的な庭師の証しとはならない。庭師は自然の恵みを収穫するのであるから、もしその血流にこの情愛や精勤への気持ちが持てないようであれば、その人物がもはや理想的な庭師たることを証明することは不可能と言わざるを得ない。3つ目「技術」には彼が生業とするために体得すべき「技能」「慣習」「理解力」を求めたい。後述する理論や規則からそれを学んでもらえたらと思う……。

この後に続く技術論を前に、ずいぶん丁寧な精神論が展開されている。ここで言う庭師とは、しかしながら、第11章からの延長線上にあるホップ農園（Hoppe-garden）の造園に携わる者を指しているものであり、単なる趣味のための庭造りではないことは断っておかなければならない。ここに滲み出る庭師に求められる倫理観は、タッサーの「儉約への階段」（‘The Ladder to Thrift’）のまさに「儉約」に寄せた価値観であるが、合理主義の観点から勤勉を説くピューリタンの側面も感じられる。

第4節：科学と自然

1. 『テンペスト』

シェイクスピア最晩年（1608-13年頃）の作品群はロマンス劇と呼ばれ、創作年代順に『ペリクルーズ』（*Pericles*）、『シンベリン』（*Cymbeline*）、『冬物語』（*The Winter's Tale*）、『テンペスト』（*The Tempest*）と並ぶ。いずれも離散した親族らが再会して和解する筋書きを特徴とし、父と娘の親子関係が中心に描かれているのも特徴の一つと言えるかもしれない。このうち『テンペスト』は、それらの特徴に当時流行していた魔術の要素が加わる。ここでは魔術と農業の関係について考えてみる。

ミラノ公爵として名を馳せたプロスペロと娘のミランダは、政変によって祖国を追われ、地中海に

浮かぶ架空の孤島に流れ着く。この島には原住民で怪物のキャリバン、そして妖精たちが住んでいた。プロスペロは魔術を使って妖精を操り、怪物キャリバンを奴隷とする。3歳になる前にこの島にやってきたミランダは、父から教育を受け、12年の歳月が流れた。ある日、沖合に立派な船が現れるとプロスペロは魔術で嵐をおこし、船を転覆させて乗客を島に打ち上げさせる。この船にはナポリの国王一行が乗っており、プロスペロから公爵位を篡奪した弟のアントーニオも帯同していた。乗客はグループごとに島の各地に打ち上げられるが、ただ一人、ナポリ王子ファーディナンドだけは単独で上陸をする。これもプロスペロによって「喜びをもって勧められた壮大な計画」だったのであろう。ファーディナンドはミランダと出逢い、恋におちる。二人は互いに愛し合い、プロスペロも結婚を認める。父親が二人を祝福して開催するのが妖精による祝婚劇である。

Iris: You sunburn'd sicklemen, of August weary,
Come hither from the furrow and be merry.
Make holiday; your rye-straw hats put on,
And there fresh nymphs encounter every one
In country footing. (*The Tempest*, IV. i. 134-38)

アイリス 繁忙期八月の陽焼けした農夫たち、
畦を離れて、陽気に過ごしましょう。
今日一日はお休みを。麦藁帽子を被ったら、
目の前の瑞々しいニンフと向かい合い
田舎踊りを踊りなさい。

アイリス (Iris) は虹の女神で結婚の神ジュノー (Juno) の使者。ここでは農耕の女神シーリーズ (Ceres) と組み、ミランダとファーディナンドの結婚を祝福する。ひと時の安らぎは、労働からの心身の解放とともに、共同体における後日の結束の確認となる。この妖精たちによる祝祭劇のイリュージョンにはどのような意味があるのだろうか。影には実体が伴う。この虚像に照応する実像は薪運びの試練を課されたファーディナンドであり、それに寄り添い農作業にともに取り組むミランダの姿である。

Fer. No, precious creature,
I had rather crack my sinews, break my back,
Than you should such dishonor undergo,
While I sit lazy by.

Mir. It would become me
As well as it does you; and I should do it
With much more ease, for my good will is to it,
And yours it is against. (III. i. 25-31)

ファーディナンド いいえ、美しい人よ、
筋肉が断たれ、背骨が折れようと、
あなたに不名誉なことはさせられません、

自分だけ腰をおろすなんて。

ミランダ 私にこそ相応しいのです
あなたに相応しいのであれば。むしろ私には
ずっと気楽にできるはず。やりたい気持ちがあるのですから。
あなたの気持ちには反しているようですが。

プロテスタント的な労働倫理の実践ともいえるミランダの勤勉さは、結婚が認められるための工程を示し、一般的には通過儀礼として理解できる。しかし、なぜ魔術師は農作業を結婚の通過儀礼としたのか。農業と魔術の接点はどこにあるのか。その疑問に答えるには『テンペスト』の提示する根本的な問いに戻らなければならない。すなわち、魔術とは何かである。

プロスペロは自らの魔術を *art* と呼ぶ。大嵐をおこすのも、妖精を操るのも *art* による。

The direful spectacle of the wrack, which touch'd
The very virtue of compassion in thee,
I have with such provision in mine *art*
So safely ordered that there is no soul— (I. ii. 26-29, emphasis added)

悲惨な難破の光景は、おまえの憐れみの情を
誘ったのであろうが、
それは予め魔術によって、一人の命も落とさぬよう
準備万端整えてあったものだ。

art の対立概念は *nature* であるが、シェイクスピアの時代、その対立軸自体が細動していた。ここで用いられる *art* は近代科学の前身とされるオカルト哲学 (*occult philosophy*) に属す。「宇宙は3つの世界、つまり元素世界、天空世界、叡智世界に分れている。各世界はその上の世界からの影響を受け、それゆえに創造主の美德は叡智世界にいる天使を通り、天空世界の星へと下降し、そこから元素世界にある元素と元素から成立する万物へと下降する」(イエイツ 75)。この原理に基づいてアグリッパ (Heinrich Cornelius Agrippa von Nettesheim, 1486-1535) は「自然的魔術」「天空的魔術」「儀式的魔術」を編成し、宇宙の創造主の叡智に迫ろうとした。エリザベス1世の宮廷錬金術師ジョン・ディー (John Dee, 1527-1608?) や、フランシス・ベーコンの自然哲学等、このドイツ・オカルト哲学の影響はただちにイングランド知識人におよんだとされる。

これがやがて近代科学の基盤となる実証主義へと発展するすると、宇宙の創造主まで遡源する自然界の仕組みが徐々に解明され、宗教や民俗風習と対峙することになる。シェイクスピアのイングランドはその過渡期にあたる。プロスペロの擬似仮面劇は、グレコ・ローマンの古い宇宙観を表象しており、あたかもそれを演出する魔術師は、全知全能の神の如き存在としてイリュージョンの世界に君臨する。

一方、ナポリ国王の側近ゴンザーロによる理想国家は、言うまでもなく、自然を操作するプロスペロへの強烈なアンチテーゼである。

All things in common nature should produce

Without swear or endeavor: treason, felony,
Sword, pike, knife, gun, or need of any engine,
Would I not have; but nature should bring forth,
Of it own kind, all foison, all abundance,
To feed my innocent people. (*The Tempest*, II. i. 160-65)

共同で使うものであればすべて自然が産み出すはず
汗水かかずともだ。反逆、重罪、
刀、槍、短剣、銃、あらゆる武器も、
必要はなくなる。無垢な人々であれば自然は
あらゆる滋養、あらゆる豊穡もたらし
養ってくれるのである。

ゴンザローの理想国家は明らかに墮罪以前の楽園が意識されている。art が（超）自然を支配するこの島において、『テンペスト』は農業を不要とするエデンの園をその地平に眺める構図を取っている。そして、最終的にプロスペロが魔術を捨て、ミラノへの帰途につくとき、我々は art が nature を超えられなかったことを告げられる。イギリスに押し寄せる自然哲学の波に対する、これがシェイクスピアの答えなのか。自然を操作することについて、詩人は最後まで悩み続けているように思える。

2. 『冬物語』

王政復古期の叙述家ジョゼフ・グランヴィル (Joseph Glanvill, 1636-1680) の『更なる前進』(*Plus Ultra*) の一節をスコットは『シェイクスピアの自然』の冒頭に置いた (Scott 1)。

So that Nature being known, it may be master'd, managed, and used in the Services of humane Life. (*Plus Ultra*, 87)

自然は解明できれば、支配し、管理し、人間の生活に役立つように利用できる。

グランヴィルの一節は、実は次のように続く。

This was a mighty Design, groundedly laid, wisely exprest, and happily recommended by the Glorious Author, who began nobly, and directed with an incomparable conduct of Wit and Judgment: (87-88)

これ（自然）は、輝かしい創造主によって周到に準備され、思慮深く表現され、喜びをもって勧められた壮大な計画であった。主は崇高なお気持ちで、類い稀な叡智と分別をもって指示された。

「英国学士院会員、チャールズ 2 世の直属牧師、バス大寺院の教区長」、すなわち「理性的な聖職者であり、熱心な近代主義者」（ウイレー 207）であるグランヴィルは、キリスト教の合理性について語らねばならない機械論的自然観が勝利した王政復古期の思想家である。グランヴィルは信仰の擁護

間が自然の力を制御し、支配し、その有用性を高めて利用することを批判し、ナイーブなまでにその純粋性に拘る姿勢を彼女は見せる。

しかし、接ぎ木の農業技術は紀元前から用いられてきた。初期近代の農書においても様々な技法が紹介されている。マーカムの『イギリスの農夫』でも台木 (stock) と接ぎ穂 (scion) による通常の接ぎ木法以外にも、樹皮 (bark) との接合法についても詳しく述べられている。シェイクスピアの園芸に関する知識について、特にその材源が指摘されることはまれであるが、当時簡単に入手できたであろう農書からポリクシニーズの知識は拾うことができたはずである。

確かに、パーディタが体現する物語中盤のボヘミアの牧歌的な世界は、洗練された宮廷文化と対比的に描かれているように見える。しかし、パーディタの養父の羊飼いかも、その息子の道化も、彼女を拾い上げたときに入っていた金貨で生活が潤い、牧羊業をやめ、いまや労働を放棄した無職の消費者でしかない。ここで接ぎ木のエピソードが再燃する。劇作家は羊飼いかという台木に王家の接ぎ穂を副える実験を試みる。パーディタの素性がわかるや、道化の兄は紳士を名乗る。

No swear it, now I am a gentleman? Let boors and franklins say it, I'll swear it. (V. ii. 159-60)

紳士だから誓言していいだろう。言うだけなら小作人や地主に任せておこう。俺は誓言するよ。

羊飼いかの息子は 'gentleman' という言葉を恐る恐る使う。しかし、ここで言う「地主」 ('franklins') はヨーマンを指すからこの階級認識は正しい。さらに「お前の息子や娘はみな生まれながらのジェントルマンだ」 ('thy sons and daughters will be all gentlemen born.' 126-27) と父も恐る恐る言う。階級を飛び越えよとする牧羊業者の不安が凝縮され、高度な笑いへと昇華されている。

引退直前のシェイクスピアによる human nature の操作は果たして成功しているか。ウォリックシャーのシェイクスピア家はもはや小作人でもヨーマンでもないと言わんばかりに聞こえるが。

結論

地のすべての獣、空のすべての鳥、地に這うすべてのもの、海のすべての魚はおそれおののいて、あなた方の支配に服し、すべて生きて動くものはあなた方の食物になるであろう。(「創世記」 9.2-3)

(中略) テューダー期やステュアート期の説教師たちが聖書の物語を解釈するときの驚くべき人間中心主義を今日再び繰り返すことなどはできない。というのも、彼らは世界がいま見えているような状況に置かれているのはアダムの罪が直接の原因であると言って憚らなかった。「汝のために大地は呪われている」(創世記 3.17)。野生の動物が獐猛になり、醜悪な爬虫類が存在し、家畜がみじめに殴打されるのもすべて墮罪によるものなのである。「動物はそれ自体のために創造されたのではなく、人間に利用され仕えるために創造されたのだ」とジェームズ朝の主教は言った。「たとえ悪に向かういかなる変化が動物に訪れても、それは彼らの罪ではなく、われらの罪なのである。」(Thomas 18)

キース・トマス (Keith Thomas) は『人間と自然界』(*Man and the Natural World*) の中で、「創世記」を引きながら、大洪水以後の人間の自然界における優越性について、初期近代イングランドの神

学的状況をこのように説明する。それでは、植物との関係についてはどうであろう。その特性を人間の事情に合わせて操作して良いものなのか。パーディタの憂鬱を癒すことなく、ゴンザーロの理想郷を実現させないまま、シェイクスピアは故郷ストラットフォードに帰って行ったが、農業も同じ神学的ジレンマに陥っていることを警告する晩年の詩人の声にそっと耳を傾けたい。雑種形成の法則がやがて19世紀の科学者の手によって解明されることを現代に生きる我々が知っていようとも、である。

人間の手で変異性が作り出されるわけではない。人はただ、意図しないまま、生物を新しい生活条件にさらすのみである。すると自然が生物の体の仕組みに作用し、変異を起こすのだ。しかし人間は、自然が提供する変異を選択することができるし、それを実行することで望むままに変異を蓄積する。そうやって人は、動物や植物を自分の利益や楽しみのために適合させる。

(『種の起源』第14章)

ヨーロッパ文明が農業をどのように位置づけ、実際に誰がどのように田野を耕し、そこからどのようにして利益を生み出すことを覚えたのか、この3章にわたるプロジェクトは「農書」を通してその過程を考察してきたつもりである。そして、エリザベス朝「農書」と文芸との関わりについての考察は、いまだ我が国においては開拓されていない領域であるということも了解されたかと思う。したがって、初期近代の文芸における農書を通じた農業倫理および労働倫理の醸成は、18世紀農耕詩の展開に関わるだけでなく、イングランドの人々の価値観形成に深く関わってきたという角度で切り込むとき、さらにダイナミックな研究の地平が現れてくると思えるのである。

注

*本稿のシェイクスピア作品の幕・場・行は、すべて *The Riverside Shakespeare*, 2nd Edition (Houghton Mifflin, 1997) による。

引用文献

- Batho, Gordon. 'Landlords in England.' *The Agrarian History of England and Wales*. Vol. IV. Ed. Joan Thirsk. Cambridge: CUP, 1967.
- Campanella, Tommaso. *La Città del Sole: Dialogo Poetico (The City of the Sun: A Poetical Dialogue)*. Translated with introduction and notes by Daniel J. Donno. Berkeley: University of California Press, 1981.
- Crowley, Robert. *The Select Works of Robert Crowley*. Ed. J. M. Cowper. Early English Text Society, 1872. Kraus Reprint, 1987.
- Dyer, Christopher. 'Warwickshire Farming 1349-1520: Preparation for Agricultural Revolution.' *Dugdale Society Occasional Papers*. No. 27. Oxford: Dugdale Society, 1981.
- Everitt, Alan. 'Farm Labourers.' *The Agrarian History of England and Wales*. Vol. IV. Ed. Joan Thirsk. Cambridge: CUP, 1967.
- Glanvill, Joseph. *Plus Ultra*. 1668.
- Hall, Edward. *Hall's Chronicle*. 1548. New York: AMS Press Inc., 1965.
- King, John N. *English Reformation Literature*. Princeton: Princeton U P, 1982.
- Loder, Robert. *Robert Loder's Farm Accounts 1610-1620*. Ed. G. E. Fussell. London: Offices of the

Society, 1936.

Low, Anthony. *The Georgic Revolution*. Princeton: Princeton UP, 1985.

Markham, Gervase. *The English Husbandman*, The First Part. 1613.

Markham, Gervase. *The English Housewife*. 1615. Ed. Michael R. Best. Kingston and Montreal: McGill-Queen's UP, 1986.

McRae, Andrew. *God Speed the Plough*. Cambridge: CUP, 1996.

Orwin, C. S. *A History of English Farming*. London: Thomas Nelson and Sons Ltd., 1949.

Schoenbaum, S. *Shakespeare's Lives*. Oxford: OUP, 1970.

Scott, Charlotte. *Shakespeare's Nature*. Oxford: OUP, 2014.

Thirsk, Joan. *The Agrarian History of England and Wales*. Vol. IV. Ed. Joan Thirsk. Cambridge: CUP, 1967.

Thomas, Keith. *Man and the Natural World*. 1983. Penguin Books, 1984.

Tusser, Thomas. *Five Hundred Points of Good Husbandrie*. 1573, 1577. Ed. Sidney John Hervon Herrtage and William Payne. London: The English Dialect Society, 1878.

Virgil. *Eclogues, Georgics, Aeneid Book 1-6*. Trans. H. R. Fairclough, 1916. Rev. G.P. Goold. Loeb Classic Library. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1999.

Wall, Wendy. 'Renaissance National Husbandry: Gervase Markham and the Publication of England.' *Sixteenth Century Journal*, XXVII / 3. 1996.

Wood, Michael. *In Search of Shakespeare*. London: BBC Worldwide Ltd., 2003.

Youings, Joyce. 'The Church.' *The Agrarian History of England and Wales*. Vol. IV. Ed. Joan Thirsk. Cambridge: CUP, 1967.

イエイツ、フランシス 『魔術的ルネサンス』 内藤健二訳 晶文社 1984

ウイレー、バジル 『十七世紀の思想的風土』 深瀬基寛訳 創文社 1958

ダーウィン、チャールズ 『種の起源』(下) 渡辺政隆訳 光文社 2009

引用 HP (いずれも 2019 年 10 月 30 日確認)

British History Online <https://www.british-history.ac.uk/vch/warks/vol3/pp215-220>

The Shakespeare Family History Site <https://sites.rootsweb.com/~shakespeare/>

Worcester Record Office <https://www.familytreeresources.com/worcestershire-record-office.html>

参考文献

Halliwell-Phillipps, J. O. *Outlines of the Life of Shakespeare*. 1882. New York: AMS Press, 1966.

Markham, Gervase. *Markham's Farewell to Husbandry*. 1620, 1676.

Palmer, Roy. *The Folklore of Warwickshire*. London: B. T. Batsford Ltd., 1976.

ウエルギリウス 『牧歌／農耕詩』 小川正廣訳 京都大学学術出版会 2004

オーウィン、C・S 『イギリス農業発達史』 三澤嶽郎訳 御茶の水書房 1978

カンパネッラ、トンマーゾ 『太陽の都』 近藤恒一訳 岩波文庫 1992

スペンサー、エドモンド 『妖精の女王』 熊本大学スペンサー研究会訳 文理書院 1969

ベーコン、フランシス 『ニュー・アトランティス』 川西進訳 2003